3-3-1　農業や諸産業の発達

# 農業の進歩

＊佐藤家文書　和漢240「農具便利論」

## 解　説

「農具便利論」（全3巻，1822〔文政5〕年刊）は，宮崎安貞・佐藤信淵とともに江戸時代の三大農学者に数えられる大蔵永常（1768～1861）の著。鍬をはじめとしてあらゆる種類の農具を各部分の寸法・重量も含め詳細に図解したもので，これらの農具は，各地で開かれた農具市等において普及していきました。

防長では，江戸時代の新田開発を「開作」とよびます。武士・町人らの活発な開作により，防長の海岸線には塩浜や水田が広がり，生産力は向上し，またその広大な土地は，近代化によって工業地帯へと変貌していきました。

大蔵永常はまた，「広益国産考」において西日本の先進的技術を広く紹介し，ハゼ・ワタなどの商品作物を栽培して農家経営を安定・向上させることを強く主張しました。「防長の四白」とうたわれた米・塩・ろう・紙のうち，ろうの原料となるのがハゼの実であり，今なお県下に古木をみることができます。またワタは岩国の錦川河口デルタで盛んに作られました。

＊すでに元禄期に成立していた宮崎安貞の『農業全書』は，その総合的な内容と，日本で最初に木版印刷により公刊された農書として以後の農書・農業に大きな影響を与えました。当館にも小田家（山口市）・河崎家・武永家のものが収蔵されています。
＊諸産業の発達に関しては，以下のような関連資料があります。
鉱業：軸物類8「鉱山採鉱絵巻」など。
漁業：県庁戦前A　農業505，506「旧藩漁業制度取調書」など。
製塩業：毛利家文庫　34産業14「大島郡小松村浜塩焼由緒」など。
＊四季おりおりの農作業の様子を描いた絵画資料に，安部家文書1526「四季農耕図（紙本着色）」屏風があります。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る